String Fiction Series

6

解散

YAMANAKA TOMOTAKA
山中與隆
Duo-Yamanka

解散

山中與隆

目次

解散　1
編者あとがき　49

解散

山中與隆

「そうだ、次の練習日決めとこう。いつがいいかね」一番早くバイオリンを片付け終えた時田信子が、まだ楽器を片付けている三人に呼びかけた。第二バイオリンの山口瑞穂とビオラの吉村正孝が、床に広げ

た楽器ケースの前で、手を休めてそれぞれの手帳を取り出して、必要なページを開いた。
「一ヶ月くらい先だったら、連休明けだけど、九月二十四日くらいかな」
吉村が言った。
「その連休、ドライブに行くことにしてるから、私はその一週間前がいい」
と山口が、新調したばかりの真っ赤なバイオリンケ

ースを閉じながら言った。時田と吉村は、山口の言う十七日で構わないと言った。手帳は手にしていたが、その間何も発言しなかったチェロの梅本晃が、重々しく口を開いた。

「僕、今日で辞めることにするよ」

梅本が口にしたその内容は、この日の練習も無事終わって、さあ次だと言う雰囲気の場面に、大きな波紋を投げかけた。それはあまりにも唐突だった。

時田、山口、吉村の三人は、何も言わずに梅本の方を見て、彼の次の言葉を待った。みんなに注目されて梅本は、何かを言わざるを得なくなった。

「最近僕、チェロを弾くのがすごく面倒になってしまってね。カルテットのために練習するのも億劫で仕方ないんだ。こんなんじゃみんなに迷惑かけるし」

「迷惑だなんて、そんなこと無いよ。今日だって、いつもと同じにちゃんといい練習ができたじゃな

い」

と言ったのは、メンバーの中では最も梅本と親しい第二バイオリンの山口だった。ビオラの吉村も援護した。

「七十五にもなったら、いや七十六か、練習が億劫なことなんかよくあるさ。大儀なときに無理して練習しなくても、気が向いたときにすれば、このカルテットは十分にやっていけると思うよ。あんたには、

これまでの蓄積もあるし」
吉村は梅本と同い年である。
「そうよ。辞めるなんて、とんでもないわ。疲れてるんだったら、次の練習はもう一月先にしてもいいし。ね、時田さん」
と言ったのは、山口だ。話を向けられた時田は、
「ええ」
と言っただけで、それ以外の意見は言わなかった。

「まあそんなこと言わないで、やっぱり来月やろうよ」

吉村が促したが、梅本は、

「悪いけど、皆さんは、大いにやる気なんだから、水差して申し訳ないけど、誰かチェロ探して続けてもらいたいんだけど。澤田さんだったらやってくれると思うよ」

澤田と言うのは、澤田光江と言う五十代の主婦で、

このカルテットのみんなが知っているアマチュアチェリストである。時田が口を開いた。

「もう七、八年もこのメンバーでやってきて、お互い忌憚無く意見が言えるようになったし、響もよく合ってきたのだから、澤田さんはいい人だと思うけど、すぐには今のようには行かないと思うわ。チェロ弾くのに疲れてきたのだったら、山口さんが言われたように一月お休みにしてもいいし」

「皆さんが、そう言ってくれるのは有難いけど、この気持ちは今に始まったことじゃないから。やっぱり抜けさせてもらうよ」

意思を曲げようとしない梅本に対して、その場で『じゃあ、そうしたら』とは誰も言えなかった。結局、今日のところはこれくらいにして、また考えましょうという感じで、この日は解散となった。四人とも釈然としない気持ちを抱えて家路についたのだ

った。

時田信子は、梅本があのようなことを言い出したのは、練習中の梅本に対する自分の言葉が原因かもしれないと考えていた。この日、『タイスの瞑想曲』という、バイオリン独奏の美しい曲を、弦楽四重奏で弾けるようにした版で練習していたときのことだった。この曲では山口瑞穂がメロディを受け持ち、普段は第一バイオリンをしている時田信子が第二バ

イオリンであった。

曲の冒頭、チェロが低い二本の弦で、八分音符で五度音程を弾き始め、そのまま最初の五度の二音を和音で弾き続ける。それに続けてビオラと第二バイオリンが八分音符の分散和音を積み上げていく。つまりチェロから八分音符の分散和音が、第二バイオリン以下の三つの楽器で弾かれるのだ。それがこの曲のほとんど全体を貫く伴奏となっている。その分

散和音の伴奏に乗って、ソロのメロディは三小節目から始まる。

弦楽器の五度の和音はぴったりと音程を合わせるのが難しい。梅本の出した五度の和音がひどく外れていたわけではなかったが、必ずしも綺麗な五度とは言えなかった。そのとき時田は梅本に、

「その和音で始められたら、それに続けるのがメチャメチャになって弾けなくなってしまうわ。和音じ

やなくて単音にしてもらえないかしら」
と言ったのだった。それを聞いた山口も、
「五度は大変だから低い方の音だけ弾いたら」
と言った。梅本は作曲家が、この場合は編曲者だが、チェロに与えた音符を、音程が正しく取れないから全部弾くことを諦めろと言われているわけで、いささか屈辱を感じながら、
「音程が悪いから？」

と、ムッとした気持ちを抑えて辛うじて聞いた。聞くまでも無くそういう意味なのだが、時田は歯切れの悪い言い方で、

「音程が悪いと言うか・・・兎に角、その後弾く分散和音の音程がとれなくなってしまうの」

「僕の五度の音程、そんなに悪い？」

梅本は自分が音程のあまりよくないチェロ奏者であることは自覚していた。カルテットで他の三人は

チェロの音に合わせて音程をとるものだと、よく聞かされてきた。しかし、後の人が弾けなくなるほど酷いと、口に出して言われたのは初めてであった。

梅本は仕方なく、低い方の音だけを弾くことにした。すると三人ともが、

「それだったらすっきりするね」

と言った。しかし、梅本は実際に自分が出した音を注意深く聞くと、単音でも決して正しい音程で弾け

ていないと思った。梅本は、チェロの駒に取り付けられるチューナーで確かめながら弾いた。チューナーで確かめながらと言っても、音は出してから初めて正しいかどうかが確かめられる。梅本は、低いレの音を何小節か続けて出すだけのところでも、出すたびに音程が僅かずつぶれている。これでは、五度の和音は酷いものだったに違いないと、納得した。それにしても、五度をやめて単音にしたら、『すっき

りした』とみんなが口をそろえたのは、いったいどういうことなのだ。自分が出した音は単音でも正しくないのに、と梅本は思った。

いずれにしても梅本は、『僕の音程は正しい』と言えない自分が悔しかった。梅本は、最近音程練習をしていないことを思い出した。音程練習をすると多少はましになる。しかしそれを怠けるとすぐに元に戻ってしまう。梅本は、あまり楽しい練習ではない

が、まじめに音程練習をやることにしようとひそかに思った。

もっとも、音程のことを言われて、『自分は正しい』と言い切れるアマチュアは多くはいないだろう。ただし未熟のためだけでなく、人によって音程感覚に癖があることもあり、兎に角音程の問題は難しい。

梅本は時田信子から、問題点を指摘されることがしばしばある。たとえば、音の出が遅れると言う注

文が多い。それは特に新しいフレーズに入るときの音のことである。これも練習を録音したときなどに、リプレイを聞くと確かにチェロの音の出は、一瞬遅れていることがある。これも梅本が音の立ち上がりをクリアに出せないと言う、技術上の問題なのである。またチェロと言う、カルテットのほかの三つの楽器よりも図体が大きく、弦も太いために、特に低いほうの二本の弦では発音が遅れ易い傾向がある。

使っている楽器や弓の性能によっても程度は違うが、チェロ奏者は常にこのことを頭に入れておかなくてはならない。勿論クリアに発音する技術も磨かなければならないのは当然である。

しかしこの点に関しては、梅本にも言い分がある。梅本に言わせると、自分の発音遅れの問題を認めたうえで、それ以外に梅本は時田がしばしば新しいフレーズに、あまりにも直線的に入っていくと思って

いるのである。そのような場面で、梅本のチェロの音が後れて出ることが多いのだ。音楽は、そういうものではないと梅本は思っている。少なくとも自分たちが楽しんでいる古典派からロマン派の室内楽では、そのような直線的な進行はあり得ない。梅本と時田の音楽に対する感性の違いが、新しいフレーズの瞬間の音のずれを生んでいるのである。にもかかわらず時田は、梅本にしばしば

「遅れる」

と指摘する。もちろん、親が子供に注意するような物言いではないが、七十過ぎた者にとっては、たとえ敬語の付いた言い方であっても、子供が注意されたのと同じように聞こえるものだ。それがあまりにもたびたびのこととなると、梅本からすると、まるで彼がカルテット仲間として失格だと言われているような気がしてきても不思議ではない。そのような

背景もあって、今回の『重音は無理だから、単音で弾け』と言われたことで梅本は切れたのである。

そもそも梅本晃には、カルテットの四人の中で自分だけが技術的に他の三人のレベルに達していないという劣等感があった。三人とも、梅本同様に結構な年齢なのに、みんなうまい。これまで三人の誰もそんなことを口に出して言ったことは無いから、梅本の思い過ごしかもしれないのだが、時田の時折み

せる梅本へのやや厳し過ぎるとも取れる指摘が、『梅本は、自分たちに相応しくないチェロだ』と思っていることが、袈裟の下の鎧のように垣間見えると梅本は思うのである。そのようなときに、山口と吉村の二人が、時田の発言を否定しないことも、梅本の思いを一層強くさせているのである。

梅本は子供のときから劣等感を持ち続けていた。

小学生の時には、学業成績はクラスで常に五番以内にいたのに、体操が苦手だった。野球など球技や走ることは好きだったのだが、器械体操がだめなのだ。鉄棒で逆上がりがクラスでは最後まで出来なかった。放課後、先生や同級生が居残り練習に付き合ってくれたことがある。何日目かに初めて一回だけ出来たとき、そこにいたみんなから拍手と歓声が起きた。そのとき梅本少年は、嬉しさよりも屈辱感を感じた

のだった。体操では跳び箱や逆立ちもだめだった。中学校のときは、水泳が苦手で、夏のプールの季節は嫌で仕方なかった。

それでも学業の成績は常に上位で、高校、大学と進むにしたがって、体操などでの劣等感は感じなくてすむようになった。みんなと一緒にそのようなことをする場面が少なくなったからである。高校ではマラソンでクラスの選手に選ばれたりさえもした。

大人になるともちろん、体操の競争でもあれば、子供時代と同じように屈辱的になっただろうが、大人の世界には自ら求めない限りそのような場面に遭遇することは無い。

しかし今度は、社会的地位や仕事上のノルマ、経済的な問題などで負い目を感じることは少なくない。しかもそれら大人の問題は、ちょっとばかりの居残り練習で解決したりはしないことばかりだ。

梅本がそういったことで特に劣っていたとは言えないが、本人はいつも自分は十分に出来ていない男だと感じていた。

梅本がチェロを始めたのは大学時代だ。こういうものは幼少より始めて、猛烈な訓練を続けた者の中の、ほんの一部だけがプロとしてやっていける世界である。大学生になって始めた者が上手いはずは無

い。それでもレッスンを受けたりしながら仲間同士で合奏を楽しむのは、大きな喜びが得られる極上の遊びなのである。その点草野球と似たところがある。プロ野球という見せて金が取れる世界があり、同じ野球でも似て非なる世界であるが、それでも草野球には子供から大人まで十分に夢中にさせるものがある。ただ、その素人同士の遊びにも、上手下手はある。あまりに程度の違うものが一緒に遊ぶのは、面

白くないし、草野球では危険でさえある。音楽の場合、危険ということはないが、取り上げる曲がレベルによって違ってくるので、あまりの差がある者が一緒では、遊びにならない。

梅本たち四人も、お互い暗黙の了解の下に集まったグループで、楽しく遊べる程度のレベルの一致は、一応クリアしている。しかし長年やっているうちに、遊びの質を高めていこうとするようになり、そうな

ると微妙なレベルの差が見えるようになってくる。それが「団栗の背比べ」と許しあえるうちはいいが、「ほかの人なら、これくらいは合わせてくれるのに」などと不満を感じ出すと、チーム内に不協和音が忍び込み始めるのである。

梅本は、今回のことで小学生時代の草野球の練習を思い出した。梅本は何人かの子供たちと、雨さえ降らなければ毎日のように、当時はあちこちにあっ

た広っぱで草野球に興じていた。
あるときノックによる守備練習をしていた。梅本はキャッチャーをすることが多く、そのときもそうだった。三塁には、プロ野球のボールボーイもしたことがあるという、かなりのレベルの中学生の野球少年がいた。彼はズボンだけだが、野球のユニホームを着けているほどであった。
ノックをしていた者が、バックホームと言って、

その三塁手に非常に浅い三塁ゴロを転がした。ユニホームの少年は、猛烈な勢いで前進してそのボールを掴むと、ホームベースで構える梅本めがけて、至近距離から全力で速球を投げた。そのとき梅本は本当に至近距離だと思った。梅本はその剛速球を受けずに避けてしまった。野球少年は

「ほかの者だったら捕ってくれるだろうな」

と言った。梅本は本当に怖かったから避けたのだが、

少年の言葉に屈辱を感じたのだった。
それから六十年以上たっているが、梅本は歩んできた長い人生に積み重なった屈辱の歴史に嫌気が差したのである。楽しんできたはずのカルテットで、どうしてこんな思いをしなければならないのか。梅本はあほらしくなったのである。山口や吉村は『そんなこと言わずに・・・』と言うが、彼女や彼はそのような思いに駆られたことは無いのだろうか、と梅本

は思うのだった。

しかし、結局梅本はカルテットを辞めず、練習会はひと月休むことも無く、連休の一週間前の十七日に、そのような出来事など忘れたように四人は集まった。山口と吉村は本当に忘れていたかもしれなかったが、時田と梅本は忘れていなかった。いつもなら、もっとこうしよう、ああしようとより良い音楽

作りのために、勿論梅本に対してだけでなく、積極的に発言する時田が、この日はほとんどそのような発言をしなかった。梅本はというと、比較的おしゃべりで明るい態度の普段と違って、練習中ほとんど無言であった。その二人の態度に山口と吉村が気付いたのは、練習の後半になってからだった。よせばいいのに山口が、時田と梅本のほうに向かって、

「今日は二人ともえらく無口だね」

と言った。そう自分で言いながら、山口は前回の練習のときのことを思い出した。そしてさらに、

「そうか、梅本さん何か言ってたよね」

と言い足してしまった。これで、前回のことなど水に流したように始まったこの日の練習が、一瞬にして前回の練習後の気まずい雰囲気に戻ってしまった。

聞かれもしないのに時田が、やや思いつめたような調子で言った。

「私が練習に関してあれこれ言うのは、少しでも合奏を良くしようと思ってのことで、特定の人を攻撃したりするつもりはまったくないのよ」

それはまるでその場でそれについての議論が続いてきたかのような言い方だった。しかしそれで時田が梅本の「辞める発言」に責任を感じていることが、その場のみんなに明らかになった。ただし、時田が梅本に謝ったわけではない。それだけでなく時田の

態度はエスカレートした。
「合奏の音程を綺麗にすることって、すごく大事だと思うのよね。和音が綺麗に合ったときって、アンサンブルしている幸せを最高に感じるでしょ。でも難しいのよね」
時田は何が言いたいのだろうか。梅本は、自分にもっと音程を良くして欲しいと言っているように聞こえた。山口と吉村は、和音に関しては梅本だけの

責任ではなく、自分たちも完全に出来ているわけではないと思ったし、時田自身も完璧とは言いがたいじゃないかとも思った。だから、みんなでよくしていこうと言っているのかと思った。ところがそうではなかった。

「だから私も退団しようと思う。私ももっと音程をよくして、多少でもましになったら、そういうことが出来るところでやってみたいから」

こんどは山口と吉村が衝撃を受けた。時田が梅本のことを言っていると思っていたが、そうではなく時田は彼女以外の三人に言っていたのである。『自分も音程をよくして』と言っているものの、このカルテットでは、彼女の目指すものは出来ないと言っているのである。今度は山口が、切れたかのように言った。

「そうね。みんな一度自分に戻って、徹底的に音程

の基礎からやり直すといいわね。みんなの音程が良くなったら、もう一度やり直しましょうか」

山口は、そう言いながら、再開などあり得ないと思っていた。

かくして、長年和気あいあいと続いてきた熟年カルテットは堤防の一穴から一気に崩壊に至ってしまった。そして、平均年齢七十二才以上のメンバーが、

すばらしい音程感覚を新たに身に着けて再開することは無かった。それだけではなく、カルテットが解散して一年後に、チェロの梅本が胃癌で急逝したのだ。スキルス性の胃癌だと言うことだった。知らせを聞いて時田、山口、吉村の三人は解散後初めて、梅本の告別式で顔を合わせた。

山口が、時田と吉村に、

「わたし、バイオリン二本とビオラの良い曲知って

るから、梅本さんの追悼を兼ねて一度集まらない？」と提案した。

三人は以前カルテットで集まっていたのと同じように集まった。弾いたのは、山口が楽譜を用意したドボルザークの三重奏曲だった。実は山口は、この日のために急遽楽譜を注文して間に合わせたのだった。

第二バイオリンとビオラが伴奏音形を弾くなか、

第一バイオリンが緩やかな美しいメロディを弾く。途中でメロディを弾いていた時田が弾くのを止めた。見ると涙を流している。山口と吉村も、何も言わなかったが気持ちは同じであった。

『チェロを弾くのが億劫だ』っておっしゃったころ、すでに体調が良くなかったのかも知れないね」

「いまさら言っても仕方ないけど、解散なんかしないで梅本さんの体調が続く限り、続ければよかった

ね」

「『辞める』っておっしゃった次の練習には、それまで通り集まったのに、私が早まったこと言っちゃったから」

「今考えると、やっぱり八年間の蓄積がある良いカルテットだったと思うよ」

「長年続いていて、あるのが当たり前みたいになってしまっていたのね。大切なものだと言う意識が足

りなかったと思う」

しんみりと後悔の会話が続いたが、何を言ってもすべて後の祭りだった。三人は気を取り直してもう一度初めからやり直して、今度は最後まで弾ききった。

（了）

＊この物語はすべてフィクションであり、登場する

人物その他はすべて架空のものです。

編者あとがき

著しくＩＴ技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末の Amazon のペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみながら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。それは近年まで続けられていたことがパソコンの中身から分かりました。傍におります妻の私は、とうに文筆を止めてしまっていると思っておりましたので、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ（URL:https://www.duoyamanka.com）への投稿の形でも発表していきたいと考えておりま

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1　山中與隆（やまなかともたか）の名前について

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありますが、表示されます。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生れ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れたいと思っています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なものなどジャンルを選びませんが、常にベースには何らかの形で音楽が絡んだものにしたいと考えています。

ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によってその物語にも音楽にも感動してもらえるような作品を完成させたいと思っています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

＝電子書籍＝

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた
さまよえる視察団
蒸発の衝動
インテルメッツォ
爆発
妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男
オセロー
テンペスト
定年の晩
魂の三重奏
ロシアンルーレット
ささゆり

才能移転
ある三文作家が見たもの
けんか
袖ふれあうも
ミスターフェイト
峠を越えて嫁入りした女
花火見物
ある小学校教師の敗北

三坂峠　二話
第一話《お蓮・勘兵衛　悲恋の墓》
第二話《緑のトンネルで》
阿弥陀山
ゴーシュの華麗なる転身
ある男の臨終
野の寂しさ
四重奏

親も子も老いて
わしゃ、ただの山ザルじゃ
リョウコからの電話
カルテットのある風景
「オセロ」～手紙版
出来る間に、出来るだけ
なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1　弦楽四重奏団　a

2　弦楽四重奏団　b

3　親和力

4 トリオ・ソナタ
5 不協和音
6 解散
7 音楽のある生活
8 ビオラを弾く生活
9 疑問
10 生きがい
11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

＝既刊のペーパーバック＝

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集２―ある三文作家がみたもの他

短篇集３―ミスターフェイトほか

String Fiction Series 06
解散

2022年10月30日初版発行
著者:山中興隆
編集:山中伶子
https://www.ac-illust.com/
・タイトル: 弦楽器グラデーション
作者: t-dunさん
イラストのID: 2610321
・タイトル: 花のフレーム2(黒)
作者: 猫エンジンさん
イラストのID: 1587380
https://www.silhouette-ac.com
・タイトル: 譜面台
素材のID: 105365
・タイトル: 譜面台
素材のID: 105366
https://www.photo-ac.com
・タイトル:チェロ
作者:r**********mさん
写真のID:3669919
©Tomotaka Yamanaka 2022
https://www.duoyamanka.com